

単位制・無学年制高校の生活の諸相（１）

－質問紙調査の結果を基に－

Psychological Aspects of Students' Life in a High School

with a Credit System and No Grade System (1):

A Study Based on the Results of a Questionnaire

川原誠司・菊地まり*・三戸親子**

KAWAHARA Seishi KIKUCHI Mari MITO Noriko

1. 問題と目的

1.1 高校のありようについて

高等学校（以下、高校と省略）という教育の場は、ほとんどの若者が経験するものとなっている。義務教育段階を修了したあと高校に進学し、そこで生活を終えた生徒は、大学や専門学校などへ進学したり、あるいは就職したりする。中等教育から高等教育への橋渡し、あるいは社会人としての準備段階として、高校教育というものの機能は位置づけられるだろう。

しかし一方で、生徒の価値観や学びの多様性、不本意入学者や中途退学（以下、中退と省略）する者の存在、中学校から増え始める不登校者の存在など、高校を取り巻く教育的状況は多様になってきている。高校での中退者は、平成8年度には111,989名（年度当初の在学者の2.5%）であり、中退の理由も「進路変更」「学校生活・学業不適応」「学業不振」「問題行動」等多様にわたっている。そのような中でも、「学校生活・学業不適応」数が前年度と比べて増加していることが懸念されている（文部省高等学校課，1998）。また、不登校についても、高校については全国規模の調査結果はないものの、都道府県単位の調査結果を引用して論考しているものもあり（山藤，2001）、それを見ると教育的な問題のみならず、心理学的、精神医学的問題にまで及んでいる。

これら生徒の多様な状況を受け入れる要請が高校側になされている。例えば、東京都における教育システム上の改革をみても、「総合学科高校」「単位制高校」「チャレンジスクール」「中等教育学校（中高一貫教育）」「体育・福祉高校」「国際高校」「総合芸術高校」などの新しいタイプの高校が設置・計画されている（吉田，2000）。各学校単位での教職員の組織的取り組み、教師個々の意識改革まで勘案すると、その労は多大であろう。そもそも、生徒が高校というところに求めているものが様々である。「高校卒業という資格を得たい」「深く学びたい」「大学進学に有利にしたい」「仲間との

*東京都立新宿山吹高校

**東京大学学生相談所

交流をしたい」「課外活動などの『学校らしい』生活をしたい」「今まで生きてきた義務教育とは異なる『学校らしくない』生活をしたい」といったものが例として挙げられ、一律一斉の対応だけでは困難であることが感じられる。

このような生徒の意識に関連して、「移行 (transition)」という概念で検討されてきた、学校段階が変わるときの生徒の成長段階に対する環境上の配慮という側面が浮かび上がってくる。Nicholls & Gardner (1999) では、小学校から中学校への移行に際しての教科カリキュラムをはじめとした諸変化の問題を整理しているし、Eccles et al. (1993) では、中学校に入学した生徒の発達段階の状況とそれに合わせた環境の提供という “stage-environment fit” の概念が提唱されている。小学校から中学校にかけての思春期の成長や学校システムの変化が著しいので、それに比して中学校から高校にかけての移行には注目が集まりにくい、青年期での着実な成長という点では決して軽視できない。この時期の心理的な成長を「身体」「認知」「対人」「人格」の4つの観点からまとめてみると、身体的な成長においては、成人とほぼ同様の体つきになり、第二性徴もほぼ全ての生徒が経験するので、大人としての身体的・性的な自律・自立が求められる。認知的側面では抽象的な思考、全体的な思考、客観的な思考ができ、そういう思考の深まりに応じて自分を取り巻く社会全体への意識や自分自身の将来展望などを涵養していくことが求められる。社会的側面からは、より一層の社会参加などで様々な人と出会い、視野を広げていくという交流の「広さ」と同時に、親友や恋人と自分の気持ちや考えを共有し合い、葛藤と経験してもそれをうまく処理し、理解し合うという交流の「深さ」も求められる。それら他者との交流を通して、自分のあり方が映し出される。そのような自分のあり方は人格的側面の「同一性」の獲得の過程そのものであり、周囲との適切な比較考量を通して、前述した性的な、思考上の、対人関係の面において、自らがどのような特徴を有し、何を拠りどころにして生きるのかという感覚を次第に確固としていく。高校の生活の中でこれらの側面が保障されることで、生徒の成長に資し、生徒自身の充実感・満足感にも好影響をもたらす。その意味では、社会的な高校の機能のみを考えるのではなく、高校というものが子ども個々の成長欲求に、どの程度応えられているのかを考慮することも重要になるだろう。

本論文は、高校の中でも旧来の制度とは異なる「新しい」システムで運営されているA高校（首都圏にある公立高校）に注目する。新しいシステムによって浮き彫りにされる旧来の教育上の問題や、新たなシステム内での肯定・否定の両側面を見つめることで、A高校の今後の改善に、引いては高校の教育システムが子どもの成長にもたらすものを検討する一助になることを目的にする。

(川原誠司)

1.2 「新しい」学校としてのA高校

A高校は、「単位制・無学年制」というシステムを取っている学校である。A高校のシステムにつ

いては、その近代的な建物と併せて教育関係者の耳目を集めており、さらに入学試験における内申書の比重が低いことや授業時間帯の多様さ・柔軟さもあって、不登校の生徒の進学として、あるいは高校中退者の再チャレンジの場所としても注目されている（教育オムニバス編集部，2001）。ここでは、飯島（2000）や菊地（2002）がA高校について説明した記述を基に、A高校の設立経緯やシステム・実状を述べる。

1981年6月、中央教育審議会が「生徒の能力、適性、希望の文化に応じた高校の教育内容の多様化」や「無学年制のような方法」を答申し、また1986年3月には東京都立教育研究所が、4つの『新しいタイプの高校—単位制高校、中高一貫校、総合選択制高校、新芸術高校—に関する研究』として具体案をまとめた。それらの動向を受けて1991年にA高校は開校した。定時制・通信制・生涯学習講座、さらに、一部科目履修生・連携生、大学検定の単位互換制度と、高校の教育課程に準ずるものをいろいろと入れ込んだ学校である。一般の高校生はもちろんのこと中途退学者、社会人を含む多様な学習者に、その「個別性に応じて」高校レベルの教育環境を提供する役割を期待されている。

システムの特徴は単位制・無学年制であり、入学前の在籍年数も含めて3年間で卒業可能だが、6年間在籍可能である。授業時間帯により4部から構成される普通科と2部構成の情報科を置く「定時制」と、普通科の「通信制」の2課程がある。生涯学習講座も日常的に置かれている。定時制では、平日の朝から夜まで授業が展開され、通信制のスクーリングは土曜日に、生涯学習講座は平日の他、土・日曜にも開かれている。時間割は入学前の持ち単位数に応じて組むため、各人により異なる。クラスがあり担任もいるが、平常はホームルームはない。

入学者の特徴は、中学の新卒者が少なく（20～30%程度）、前籍校で1年間在籍した者（つまり中退者）が最も多い、不登校経験者の割合が高い、入試倍率が高いなどである。多様な生徒に対応するために、開校当初から進路指導と教育相談の機能を果たす「相談部」が置かれ、授業を持たない専任カウンセラーを含め約15名の教員で運営している。生徒が自己探求を含めて充実した在学期間を送れるよう、様々な行事や活動（新入生移動教室、サマーキャンプ、デイキャンプ、オリエンテーション、履修相談、進路相談、性格検査、進路適性検査、進路説明会等）を企画・実施している。

（菊地まり）

1.3 A高校から浮かび上がってくる問題

システムとしてのA高校の特徴は前節で述べたが、果たして、A高校で過ごした生徒たちは新たなシステムの中でどのような印象を持ち、どのような気持ちで生活したのであろうか。A高校のシステムは一般的に「自由」であることが言われる。細かい校則がないことはその顕著な例であり、「ルールは『法律を守ること』だけである。ルールはないがマナーはある、というわけだ」（飯島，2000）といった記述からもうかがえる。「以前は、集団の中で息苦しかった。でも、この学校では、日常的

にはクラス単位で活動することは殆どなく、授業に出席することに専念するだけで済むので気楽だ」といった生徒の感想は端的なもので、友人を求めてクラブ活動や生徒会活動に取り組む、アルバイトや校外の活動に精を出すなど自らの興味・関心に基づいた活動を行ったり、授業で気の合う仲間を得て小グループで無理をせずに学校生活を送ったりする。しかし一方で、自由の落とし穴に陥って孤独をかこつ生徒、再び高校生になれたからと、張り切り過ぎて疲れてしまう生徒など、必ずしも自由を自分の成長の糧として享受できない者もいる。

そのような利点と問題点は卒業記念文集での生徒の記述からもうかがい知ることができる。「私たちは、新しいシステムの単位制高校を自ら選択し、校則のない学校で自らを管理し、卒業しました。私はA高校での経験は、今後あなたが、あなたらしく生きる上で、きっと役立つものであると思います」「A高校の居心地がとてもよかったのは、『常識』だとか『普通』といった私の嫌いな言葉が少なかったからだと思った」「この学校に来てから、良い意味でも悪い意味でも、『自由』というものをこれほど意識したことはありませんでした」といったA高校での生活での利点を認めているものが多い反面、「僕は、今年からこの学校の存在の是非を考えてきた。簡単に結論をいうと、否となった。中退者は、その制度を思うままに利用し、新卒者は、うやむやのうちに流されていると思う」といった感想があるなど、A高校の作り出す「自由」には手放しで全てを肯定できない問題点も内包されている。

教職員の側も様々な思いを抱えており、自由で枠組みが少ないことの混乱もあるだろう。例えば、チャイムが鳴らない、職員朝礼もない、生徒も個別に移動、毎日のホームルームがない、それまでの集団のにぎやかさがなく、朝8:45から夜の21:30まで誰かが授業をしているので放課後がない、一堂に会する機会は隔週1回の職員会議の時のみ…。これは教職員の感じるものであるが、生徒の中にも枠組みが弱いことで、このような心許なさを感じる者がいても不思議ではない。

開校8年目に現・旧教職員を対象に質問紙調査が実施されたが、その分析から「自由」に関して次のようなことが提案されている。そこでは自由を2つの側面に分け、「～からの自由」として、「お仕

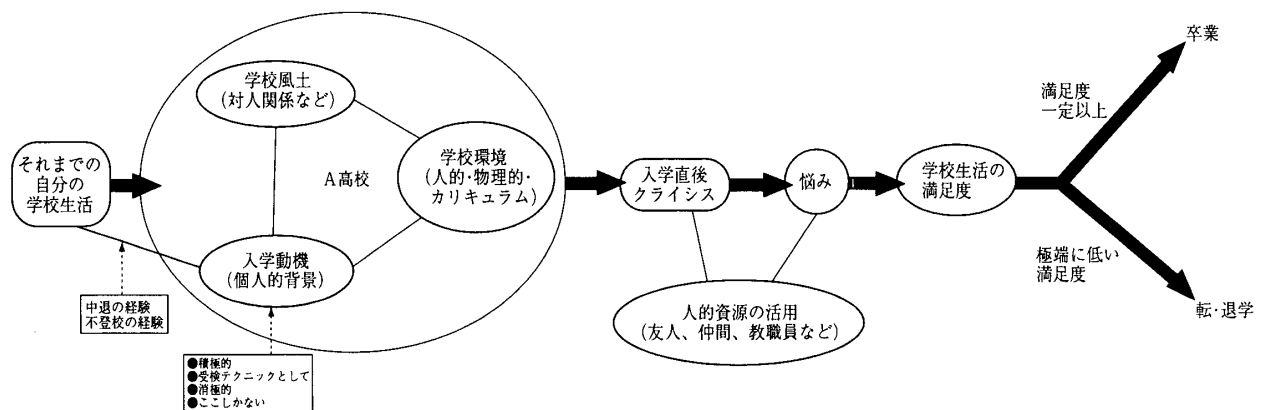


図1 本研究を行うにあたっての視座

着せの実績主義の進路指導」「担任やクラブ顧問とのトラブル」「集団生活の圧迫」「いじめ」「校則」「服装や身なりの細かいしつけ」「高校生活をまともに送っていないという呪縛」「同世代の人間関係をうまくやっていけない」といったものを挙げ、他方、「～への自由」として、「高卒資格が得られた」「自分らしく生きることを学べた」「自己実現に役立った」「進路について、冷静に考えるのに役立った」といったものを挙げている。卒業生・退学者・在学生に調査する場合の視点として「生徒たちの『～への自由』に向けて、A高校のシステムは媒介的に何を提供できているのか。何が不足しているのか」であることが述べられている。逆に言えば、それだけ生徒は「～からの自由」という段階に拘泥している可能性もあるということである。

この自由という雰囲気のあるA高校において、生徒がどのように適応し、適応できない生徒がどのような思いを抱えているのかという、自由という側面の「光（満足・享受）」と「影（不満・混乱）」の点を本研究の中心に据える。今回、生徒の生活時間の流れに対応した心理的な変容の過程を考慮して図1のようなものを考え、本論文では、この流れに基づき、主に「入学前」「入学直後」「卒業後」の3時点を視野に入れ、質問紙調査を行うことで実態を把握しようとするものである。

（菊地まり・川原誠司）

2. 方法

2.1 質問紙調査の概要

1991年4月から2000年3月までに在籍経験のあった者を対象に、2000年夏に質問紙調査を実施した。創立以来9年間に該当する者（全対象者）の人数としては、入学・編入学して卒業した者1428名、転・退学してしまった者616名の計2044名である。

調査は郵送形式を採った。宛先不明による不達を除いて1656通（全発送数の81%）が送付されたものと推計される。回答数は卒業生から280通（卒業生全体の19.6%）、転・退学者から49通（転・退学者全体の8.0%）の計329通（送付された内の19.9%、発送された内の16.1%）であった。さらに、回答者の性別比は、男性36%、女性64%であり、年度別にみると各入学年度それぞれ10数%ずつである。入学までの経緯は、「中学卒業後直に（中卒後高校入学せずに年数を経た者も含む）」が33.8%、「他の高校を経て1学年相当に」が24.5%、「2学年相当以上に」が41.7%であった。

（菊地まり）

2.2 質問項目

質問項目はA高校での生活を質問する多様なものから成り立っていたが、本調査で分析する項目の内容は以下の通りである。

2.2.1 A高校卒業後の様子と、入学前の不登校経験の有無

A高校を卒業した生徒に対しては、卒業直後の進路がどのようなようであったかを7つの選択肢の中から1つ選んでもらい、また、A高校を転・退学した者については、その理由を15の選択肢の中から3つ以内で選んでもらった。また、小学校・中学校・高校の各学校時期での不登校経験の有無についても回答してもらった。

2.2.2 相談内容や相談相手

相談内容については、A高校での学習や生活にわたる6つの選択肢を用意し、その中から3つまでを選んでもらった。また、相談相手については相談内容の6つの選択肢それぞれについて、教職員、友人、家族などの27の選択肢の中から3人までを選んでもらった。

2.2.3 入学前の期待

A高校に入学する前に抱いていたイメージを測定するために、A高校の特徴と思われるものを、立地や建物、履修システム、校風などの面から20項目用意し、各項目について4段階（1→よくあてはまる、2→ややあてはまる、3→あまりあてはまらない、4→全くあてはまらない）で回答してもらった。

2.2.4 入学直後の経験

A高校に入学直後、夏休みくらいまでにどのように感じたかを測定するためである。項目については授業や人間関係などの「自由な」側面を中心に8項目用意し、それぞれの項目は“A：自由や多様さを享受できた－B：自由が悪影響をもたらした”という趣旨のbipolarな表現対にして呈示した。回答については4段階（1→Aにあてはまる、2→ややAにあてはまる、3→ややBにあてはまる、4→Bにあてはまる）で回答してもらった。

2.2.5 卒業後（転・退学後）に感じたA高校の印象

A高校に在籍していたときの生活全体を後から振り返ってみて、どのような印象を持ったのかを測定する目的である。項目は学校のルールや学校での対人関係など15項目から成り、これも2.2.4の入学直後の経験と同様のbipolarな表現対で質問した。回答段階も2.2.4と同様の4段階である。

2.2.6 満足度

A高校に在籍したことについての満足度について、「とても満足している」を1、「大変不満に思っている」を10として、10段階の評定値を用意し、自分の気持ちにあてはまる位置の数字に○をつけてもらった。

（川原誠司）

3. 結果と考察

3.1 各質問の回答結果の概要

3.1.1 A高校進学前後の様子

A高校を卒業した直後の進路の主たるものについては、「進学」が54.0%、「進学準備」が14.5%、「アルバイト」が14.1%であった。「進学」と「進学準備」を合わせて7割近くとなり、多くの生徒が進学というさらなる学校教育を希望していることが分かる。

また、A高校を転・退学した生徒の理由について、主たるものをあげると、「その他」が19.6%、「大検に合格し、進路先も決定した」が17.4%、「大検には合格したので、在籍しなくともよいと考えた」が10.9%、「大学にも在籍していたし、これ以上、A高校に在籍する必要がなくなった」が10.9%であった。「その他」が最も多く、個人的背景の多様さを感じさせる。また、大検合格や大学在籍という理由については、学びの一部として利用できるというA高校の教育システムならではの感じさせる。

A高校入学前の不登校経験については、「小学校時」が8.2%、「中学校時」が22.4%、「以前の高校時」が26.4%となっており、今回の分析人数はA高校対象者の一部であり、決して正確とは言えないが、小中学校における不登校の発生率（文部科学省の「学校基本調査」によると、平成9年度は小学校で0.26%、中学校で1.89%）との差を考えると、A高校ではそれまでに不登校経験をした者を多数受け入れていることがうかがえる。

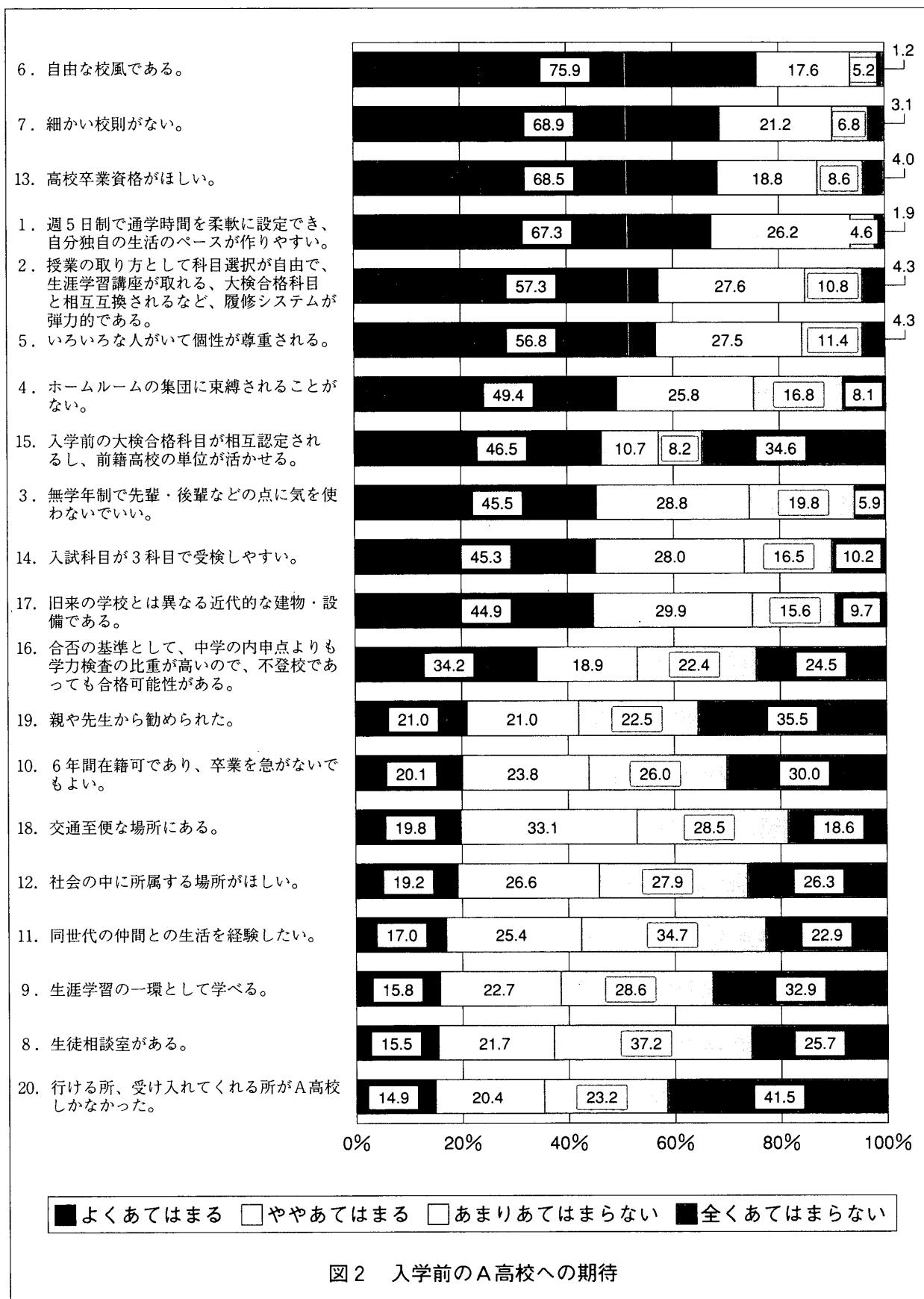
3.1.2 相談内容や相談相手

相談内容については3つまで選んでもらったが、その中で1番目に挙げられたものについて、主な者を挙げると、「教科・科目の履修相談」が30.4%、「進路の相談」が24.5%、「特になし」が17.6%、「人間関係・性格や生活の相談」が14.4%となっている。3.1.1で述べた進学希望者の多さを考えると、履修や進路の相談ということは、主たる悩みとして当然ともいえる。「特になし」というのも一定数存在することが分かるが、それらの生徒は悩みが少なかったのか、それとも悩んでいても相談しようとする姿勢が弱かったのかはこの結果だけでは定かでない。後者の理由だと心理的苦痛を蓄積させやすくなるので、そのような生徒に相談資源を提供・案内できる工夫が今後必要になるだろう。

相談相手については、数多い選択肢があったが、「ホーム担任」「友人」「母」の三者が際立っている。A高校ではクラスという枠組みが非常に弱く、専用の教室があるわけではなく、ホームルームもほとんど行われないため、「ホーム担任」の役割は自然と弱くなるのだが、相談する場合に、学校の教師の中で質問しやすい教師は、やはり担任ということになるのだろう。関わりの起点としての担任の存在意義を感じさせる。

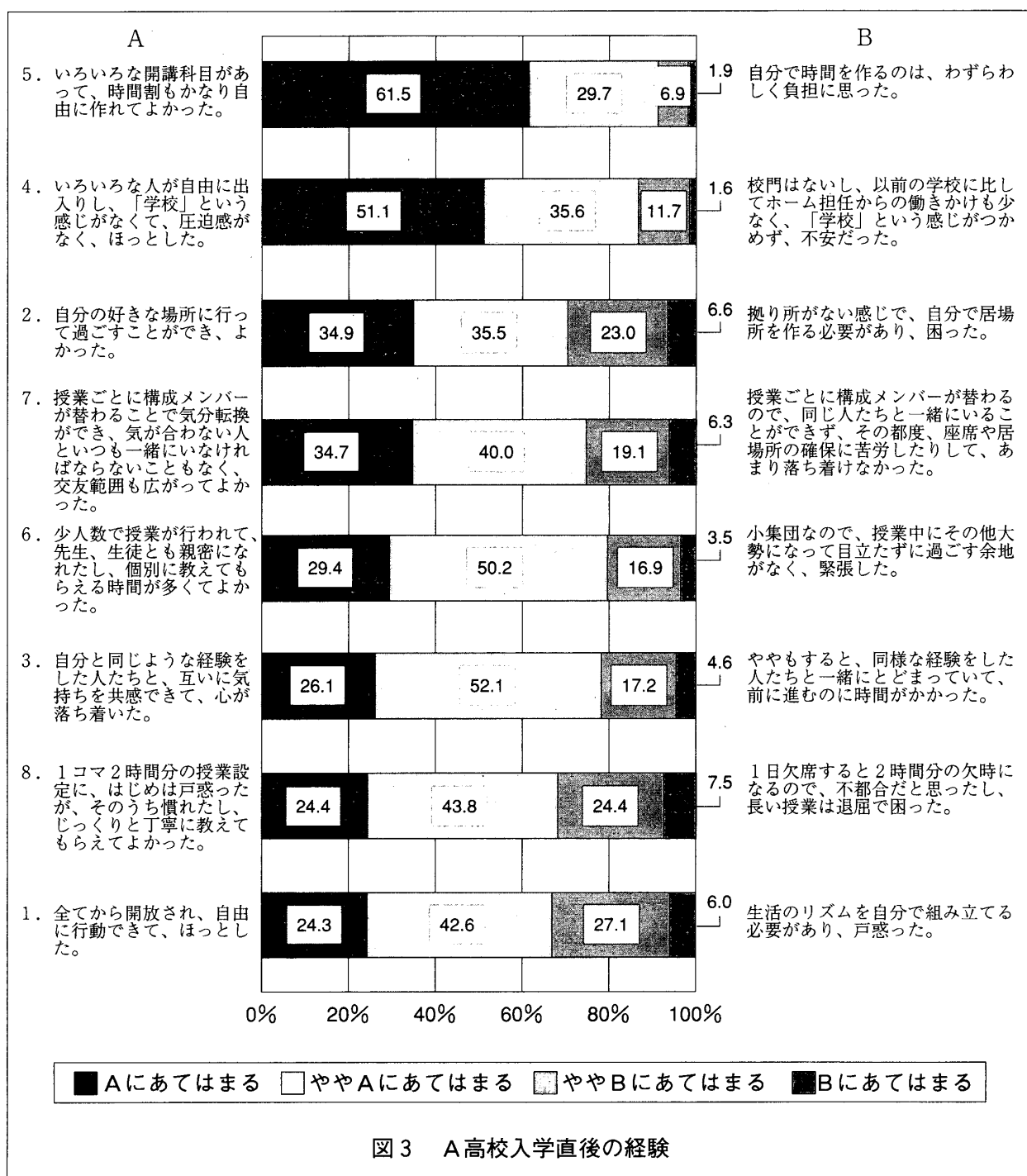
3.1.3 入学前の期待、入学直後の経験、卒業後（転・退学後）の評価

図2に入学前の期待についての結果を示した。「よくあてはまる」「ややあてはまる」の回答の多い

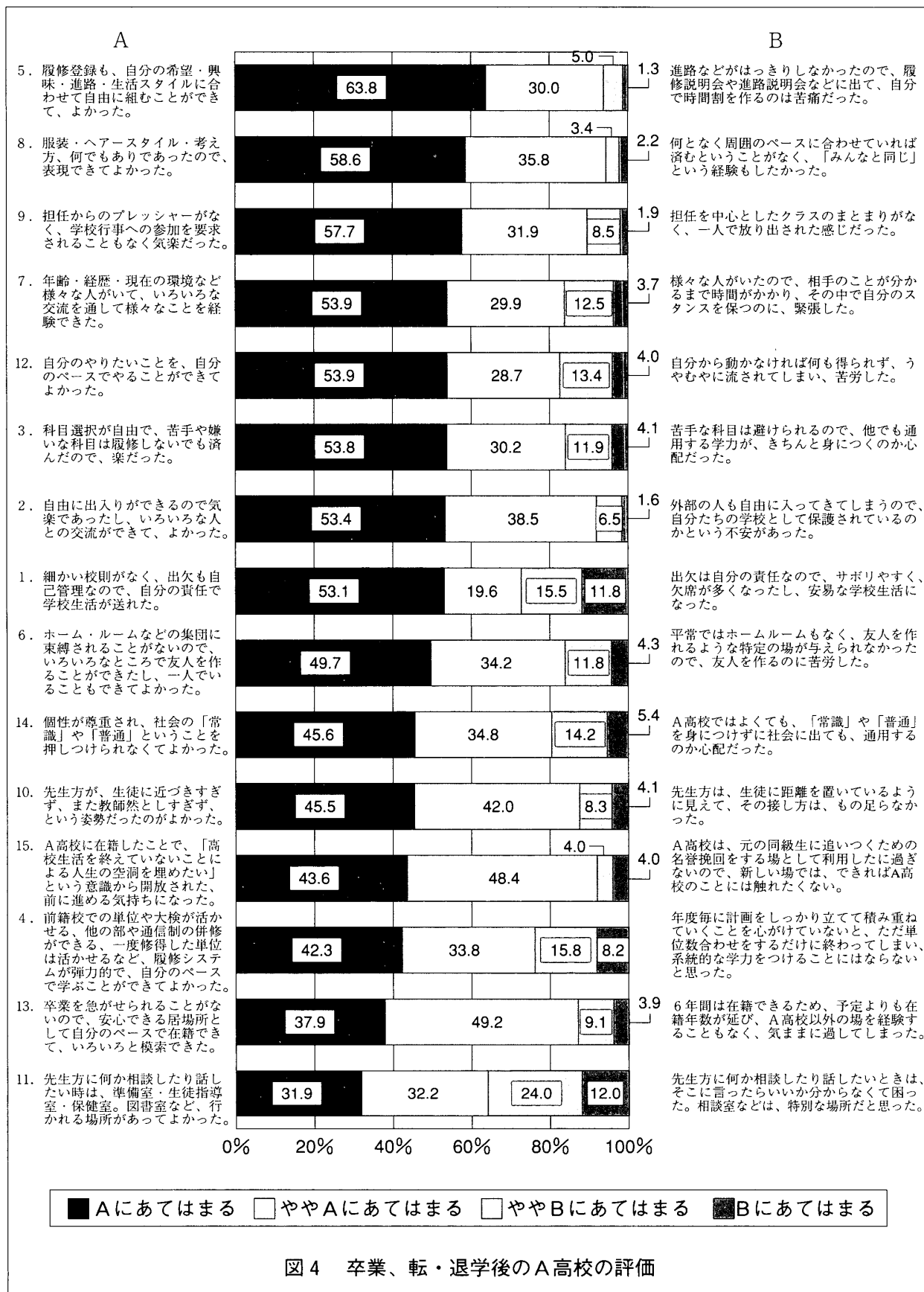


項目内容を統合してみると、「自由で細かいことを言われず、自分のペースで物事を進めていくことができ、必要な資格も得られる」といったことが、A高校の特徴として入学前から印象づけられていることが見て取れる。

図3に入学直後の経験の結果を、図4には卒業後（転・退学後）の評価の結果を示した。図3の項目5や図4の項目5など履修をはじめとした自己決定の要素がある事物への肯定的評価が60%を超えている。また、図3の項目4や図4の項目6を見てみると、「圧迫」「プレッシャー」といったことからの解放についても50%以上が良い面と捉えているようだ。とりわけ、図4の多くの項目で、自由というものの肯定的印象の方に「よくあてはまる」と回答したものが50%前後になっており、自由を享



受できた感覚が非常に大きいことがうかがえる。卒業後の評価というものが一段と高くなっており、「今までとはかなり違った自由があり、自分が充実して過ごせ、よい思い出として残った」というA



高校の認識であることがうかがえる。

これだけ自由ということが肯定的に印象づけられるということは、A高校の顕著な特徴を示す反面、それまでの中学校や中退せざるを得なかった高校の様子が、それとは反対の性格を帯びていて、それが生徒の成長欲求を何らかの形で阻害した部分があったことがにじみ出ているようにも思える。しかし、その反面、A高校での自由に対する戸惑いや心配を感じた生徒も2割前後存在している。このような生徒が感じていた否定的感情や居心地の悪さが何に起因するかを詳細に検討する必要もある。

3.1.4 全体的な満足度

数値として非常に満足している側の数値である1～3の割合について、1を選んだ者が39.8%、2を選んだ者が21.3%、3を選んだ者が18.5%と、全体の8割近くを占めている。A高校での生活は多くの生徒にとって非常に満足であったことがうかがえる。ただ、ごく少数ではあるが、6～10という不満である側の数値を選んだ生徒も各々1～3%程度存在し、そのような生徒の不満な点を聞き取り、学校側で必要な改善点があれば実行していくことも、A高校での過密な不適応を減らす要因になるだろう。

なお、以降の相関や分散分析などの検討の際には、数値を反転させて、高い数値であるほど満足度が高くなるようにしてある。

(菊地まり・三戸親子)

3.2 尺度化と尺度間の関連の検討

3.2.1 尺度化のための因子分析

3.1.3で項目ごとの主な結果を示した「入学前の期待」「入学直後の経験」「卒業後の評価」の3側面について、尺度構成のための因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。固有値の変化や因子の解釈可能性などを基に、それぞれの因子数を決定した。

「入学前の期待」については3因子を抽出した。第1因子は「自由な校風」「細かな校則がない」といった5項目（図2の項目番号6, 5, 7, 4, 3）から成り、「自由さ」の因子と命名する。第2因子は「交通至便」「近代的な建物」「入試科目が受験しやすい」などの5項目（図2の項目番号18, 8, 16, 14, 17）から成り、「設備・制度の良さ」と命名する。また、第3因子は「所属場所がほしい」「前籍高校の単位が活かせる」といった5項目（図2の項目番号12, 15, 13, 2, 20）から成り、「居場所・やりなおし」と命名する。

「入学直後の経験」については2因子構造とし、第1因子は「好きな場所に行って過ごせた」「解放され自由に行動できた」といった3項目（図3の項目番号2, 1, 4）から成り、「自由な雰囲気」と命名する。また、第2因子は「少人数授業で親密になれた」「1コマ2時間分の授業設定でじっくり教えてもらえた」といった3項目（図3の項目番号6, 7, 8）から成り、「授業形態への適応」

表1 各尺度間の相関 (n=292~311)

	自由さ	設備・制度 のよさ	居場所・ やりなおし	自由な 雰囲気	授業形態 への適応	束縛の なさ	自主的 選択	履修制度 の柔軟性	満足感
自由さ		.38	.11	.27**	.18**	.33***	.21***	-.01	.15**
設備・制度のよさ			.35	.15*	.11	.10	.17**	-.06	-.03
居場所・ やりなおし				.03	-.06	-.01	.02	.19**	-.10
自由な雰囲気					.42	.40***	.39***	.24***	.27***
授業形態への 適応						.33***	.50***	.13*	.32***
束縛のなさ							.42	.29	.37***
自主的選択								.24	.36***
履修制度の 柔軟性									.15**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

と命名した。

「卒業後の評価」については、3因子を抽出した。第1因子は「担任からのプレッシャーがなかった」「個性が尊重され社会常識を押しつけられなかった」といった4項目（図4の9, 8, 14, 10）から成り、「束縛のなさ」の因子と命名する。第2因子は「様々な人との交流ができた」「出欠が自己管理で自分の責任で生活が送れた」といった4項目（図4の2, 11, 1, 13）から成り、「自主的選択」と命名する。第3因子は「科目選択が自由」「履修システムが弾力的で自分のペースで学べる」といった3項目（図4の3, 4, 5）から成り、「履修制度の柔軟性」と命名した。

これらの因子に含まれる各項目の数値を、得点が高くなるほど自由さを享受することになるように反転して得点化した上で、その素得点合計を尺度得点とした。

3.2.2 尺度間の関連

3.2.1で示した各尺度得点や10段階で回答してもらった満足度得点について、それらの間の相関係数を算出した。結果を表1に示した。入学前の期待と入学直後の経験との関連では、「自由さ」と「自由な雰囲気」との間に $r=.27$ 、入学前の期待と卒業後の評価との関連では、「自由さ」と「束縛のなさ」との間に $r=.33$ 、入学直後の経験と卒業後の評価との関連では「自由な雰囲気」と「束縛のなさ」との間に $r=.40$ 、「自由な雰囲気」と「自主的選択」との間に $r=.39$ 、「授業形態への適応」と「束縛のなさ」に $r=.33$ 、「授業形態への適応」と「自主的選択」との間に $r=.50$ の相関が見られた。

満足度との間の相関については、入学直後の「自由な雰囲気」との間に $r=.27$ 、入学直後の「授業形態への適応」との間に $r=.32$ 、卒業後の評価の「束縛のなさ」との間に $r=.37$ 、卒業後の評価の「自

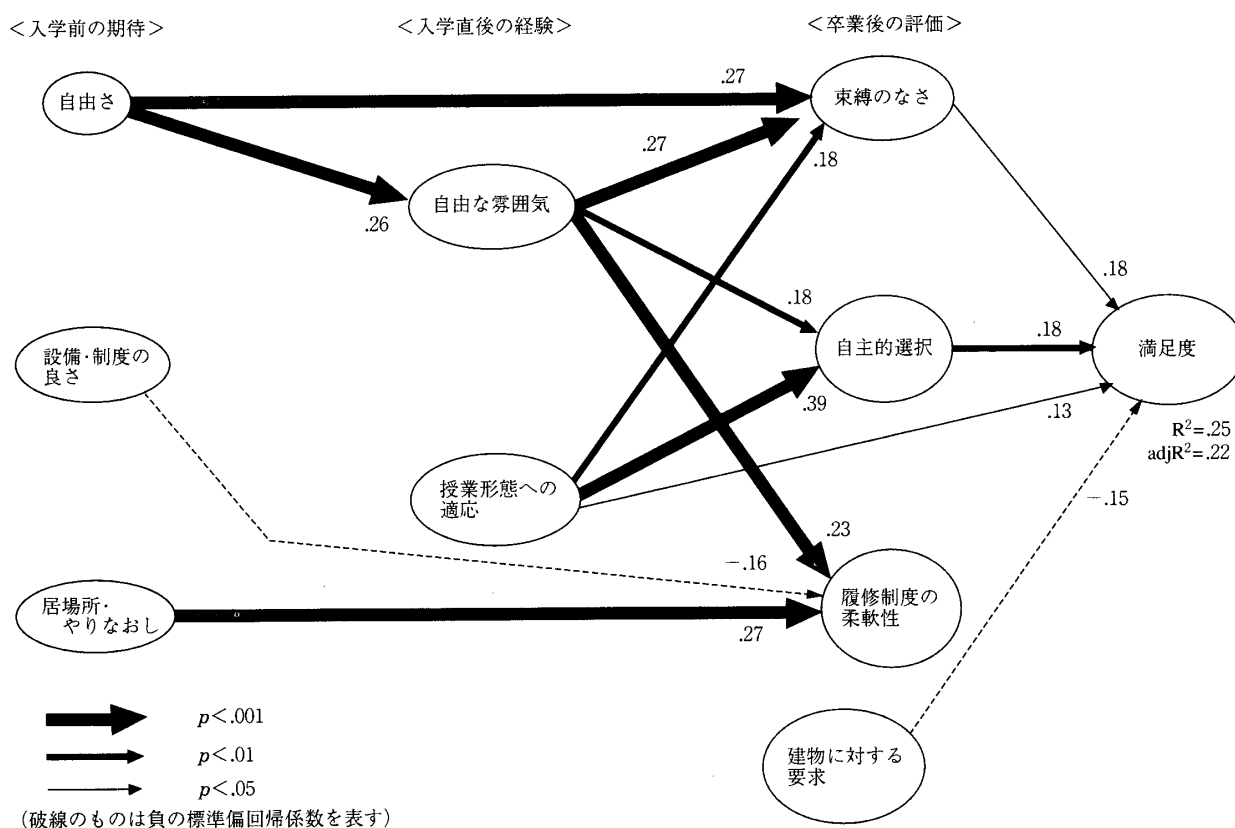


図5 パス解析の結果

自主的選択との間に $r=.36$ の相関が見られた。

回顧的な質問という制約があるので、これらの相関の高さは認知の一貫性を反映している部分もあるかもしれないが、「自由であること」「束縛のないこと」といったイメージが、経時的に関連性を持ち、よい印象として展開していくこともうかがえる。満足度との相関があることを考慮に入れると、自由なイメージを思い描いて、それがA高校での生活である程度イメージ通りに満たされることは、生徒にとって重要なことであると思われる。

尺度間の諸関連を調整し、時間的な流れでの因果関係を検討するために、「入学前の期待」→「入学直後の経験」→「卒業後の評価」→「満足度」といった流れでパス解析を行った。なお、この際に、今回の質問紙中の質問項目である学校内の具体的なスペースや場所に関する要求5項目についても、「建物に対する要求」という因子で尺度化を行い、満足度に対する説明変数として組み入れた。結果を図5に示すが、自由というものの期待や経験が卒業後の評価にまで影響し、それが満足度にも一定の影響をもたらしていることが分かる。それ以外の主な流れを見ると、「居場所・やり直し」の動機がある人は、今までの学校の科目履修形態についていけない部分があったり、再チャレンジゆえにそれまでの取得単位が無駄にならないことが、「履修制度の柔軟性」に正のパスが引かれている理由であろう。「設備・制度のよさ」から「履修制度の柔軟性」に負のパスが引かれたのは、「どのよ

表2 満足度別の各尺度得点と分散分析結果

	低 群 (n=67~70)	中 群 (n=117~124)	高 群 (n=120~126)	F 値 多重比較 (Tukey法)
自 由 さ	16.39 (3.18)	16.85 (2.96)	17.28 (3.06)	F (2, 315)=1.97
設備・制度のよさ	13.82 (3.30)	13.32 (3.44)	13.75 (3.67)	F (2, 312)=0.64
居場所・やり直し	14.69 (3.01)	13.54 (3.18)	14.28 (3.28)	F (2, 309)=3.22* 低>中
自由な雰囲気	8.45 (2.08)	9.04 (1.74)	9.79 (1.96)	F (2, 310)=11.69*** 高>中、高>低
授業形態への適応	8.16 (2.03)	8.97 (1.65)	9.46 (1.83)	F (2, 308)=11.49*** 高>低、中>低
束 縛 の な さ	12.31 (2.52)	13.34 (1.89)	14.39 (1.77)	F (2, 301)=23.98*** 高>中>低
自 主 的 選 択	11.38 (2.81)	12.35 (1.88)	13.66 (2.01)	F (2, 301)=25.67*** 高>中>低
履修制度の柔軟性	9.49 (2.14)	9.88 (1.72)	10.45 (1.49)	F (2, 310)=7.45* 高>中、高>低

* $p < .05$ *** $p < .001$

うな施設があり、どのようにすれば入学できるか」という点だけの意識に偏って入学すると、入学後の自主的な履修について困難さを感じてしまうことを意味すると考えられる。また、「建物に対する要求」が高いということは、居場所としての学校内のスペースのあり方に不満を抱えており、生活のしづらさが大きいために、満足度に負の影響をもたらしたものと考えられる。

各尺度や満足度の分布がかなり肯定的に偏った分布になっており、相関や重回帰分析の結果はある程度慎重に考えなければならない。しかし、満足度に対する説明率が20%を超えており、この説明変数には生徒自身の性格や家庭状況、周囲からのサポートといった他の重要な変数は組み込まれていない。自由に関する個人内の経験や評価という内容がほとんどなのに、それが満足度に一定の影響を与えたことは学校システムの重要性を示唆するものと思われる。

3.2.3 満足度の差による尺度得点の比較

3.1.4にも述べたが、満足度の分布は満足している方に極端に偏っている。そこで、満足度の群分けを行って、入学前の期待や入学直後の経験、卒業後の評価の各尺度の平均値差を検討してみる。なお、群分けについては、その人数をある程度均等にするため数値反転後に10になった者を「高群」、9と8になった者を「中群」、7以下のものを「低群」と便宜的に区分する。

分散分析の結果を表2に示した。「入学前の期待」については、「居場所・やりなおし」のみF値が有意になり、多重比較を行ったところ“低群>中群”となった。尺度内の項目別に検討してみると、項目13「高校卒業資格がほしい」において低群の得点が中群の得点よりも高くなっており、卒業資格

のみを考え、学校システムの特徴に目が向かないと、充実した生活という点に多少のマイナスが生じるものと推測される。

「入学直後の経験」と「卒業後の評価」の各尺度については、いずれもF値が有意になり、多重比較を行ったところ、高群が高く、低群が低いという傾向が明瞭に見られた。特に、「卒業後の評価」の「束縛のなさ」と「自主的選択」においては、“高群>中群>低群”という順序だった変化があり、自由に、自主的に行えるという評価と満足度とが密接に関連していることがうかがえる。

相関の結果と合わせ、自由ということを認識でき、それに基づく自主的な選択、履修システムに代表される多様性を自分のものとして活かせれば、満足感が高まる傾向を有している。

(川原誠司・三戸親子)

4. 総合的考察

4.1 学校で生徒に関わっている立場から

筆者の一人である菊地は、A高校で専任のカウンセラーとして生徒に関わっている。今回の調査結果から日常の教育相談活動に、そしてより幅広く捉えて、学校運営において重要なことを考察する。

3.1.2で示した、相談内容や相談相手の結果において、「教科・科目の履修相談」「進路の相談」が多いことや「ホーム担任」への相談が多かったことは、学校の中での教育相談という活動を適切に位置づけるために重要な視点である。生徒は、学校に相談するために来るのではなく、授業を受けに、仲間を求めにやって来る。したがって、生徒たちの相談室への登場の仕方は校外の心理臨床機関へのそれとは異なる。生徒相談室そのものを活用している生徒は、全体の利用件数はのべ2000件以上と多いが、(隣室の進路指導室の方の利用も合わせると、のべ4000件以上)、生徒相談室を利用している実人数は、生徒全体の約1割強～2割弱程度であり、同一生徒が繰り返し利用する傾向にある。

専任カウンセラーは学校の常勤者であり、それは、カウンセラーも日々、学校の複雑な人間関係の文脈の中で生徒たちにコミットしているということである。したがって、不適応の生徒の個別相談のみを唯一絶対のものとするのではなく、学校内で全生徒を対象に教育活動が展開されていることを念頭に置く必要がある。教師と生徒が日常的に出会う場面、基本的な関わりの土台とは「教科の授業」である。学校のカウンセラーが全ての生徒対象に包括的な援助活動を行うとしたら、学校の中で生じる生徒の悩みを配慮するのであれば、学びの場面で生じる諸感情や人間関係の軋轢を無視するわけにはいかない。このような学びに際する諸感情の重要性は、「総合学科」という柔軟な、しかし、それでいてかなり自立性を求められるシステムを持つ高校での生徒の進路選択でも浮き彫りになっている(三戸, 2002)。今回、履修や進路に関する相談の割合が多かったこと、クラスの枠組みが弱いにもかかわらず、クラス担任への相談が相対的に多かったことは、カウンセラーが「全ての子どもの悩みを聞いているわけではない」という、学校全体のシステムや人間関係を視野に入れることの重要性を示

している。

また、尺度間の関連を見たときに、「入学直後の印象が、束縛のない、自己選択できるという卒業後の印象に影響しており、自由な感じを早くから意識していること」や「自由な雰囲気を楽しむ、自己選択を行う者のほうが満足感を得やすいこと」の結果が得られていたが、A高校の現状のシステムを考えたときに具体的に介入できる方法として、以下のようなものを提言しておく。

(1) 入学直後のオリエンテーションの見直し

オリエンテーションのときに「履修登録・相談」が行われるが、開校8年目以降は能率や正確さの向上が重視される傾向にある。年々、組織的に運営できるように整理されてきており、このこと自体は歓迎すべきことではある。ただ、その裏返しに、整理されてしまったがために、生徒と教師の間で触れ合わずに削ぎ落とされたことの影響があるのかもしれないとも考えている。形式的な枠組みの少ないA高校において、「履修登録・相談」は入学時の新入生と学校とのファースト・コンタクトの場として重要が意味があるように思える。全体的に周知させながらも、個々の生徒の不安や戸惑い、逡巡といった感情に上手に寄り添えるような形式を模索していく必要があるだろう。

生徒一人ひとりの様子を見るという点でいえば、初年度から10年目までは、実施時期や実施分掌の変更はあったものの、「新入生対象の移動教室」を実施しており、カウンセラーも引率に加わっていた。しかし、11年目からは諸事情により中止となったため、別形式で生徒個々と面識を作る必要もあるかもしれない。現在、新入生と保護者全体にオリエンテーションをする機会はあるが、それをさらに丁寧にして、養護教諭と協力しながら個人面談を実施することも考えられる。自分の悩みを行動化して呈示してしまう（例えば、「家庭内での虐待の問題」「周囲を大きく巻き込む問題」「自殺企図」）、校内連携のみならず、児童相談所、病院・クリニック、心理臨床機関等、他機関との強い連携が必要なケースが増えている傾向を感じるので、活用できる専門機関の入り口（窓口）として、カウンセラーや養護教諭との意志疎通を図っておくことは重要であると思われる。

(2) 学習支援

勉強法・学習法について、カウンセラーが講義をする、また、ある生徒の学習状況についてアセスメントをするという、直接的に介入する活動のみならず、授業をめぐるコンサルテーション（作戦会議・チーム援助）や授業研究への関与等、カウンセラーが全生徒対象に、間接的な方法で教育活動を行うことも含まれる。

(3) 保護者への支援

現在も、保護者の会への支援、月1回の保護者グループの開催等を実施している。が、入学時に、保護者のニーズについての聞き取りや質問紙調査を実施することも考えられる。

(4) ホーム担任への支援

新規異動者には着任時に生活指導部共催でのオリエンテーションを実施したり、年間4～6回校内

研修会を実施したり、必要に応じてチーム援助会議（コンサルテーション、作戦会議）を実施しているが、カウンセラーに関わりがある担任には、自ずと偏りが出てきてしまう。その改善を図り、関わりの薄いホーム担任に対しても一定の情報交換ができ、重篤になる前に相談を持ち込んでもらえるような関係性を構築する必要がある。

（菊地まり）

4.2 生徒の心理的な成長との関連から

本調査から、A高校の生徒にとってA高校の自由な雰囲気というものが重要であることが示唆された。しかも、それは入学前からイメージとして存在し、在籍中には自由を享受し、卒業後の評価としても強く残ることを示している。武内（2001）は、首都圏にある4つの「特色ある高校」について調査し、一般的な高校との結果を比較してそれぞれの特色を記述している。そこに出てくる4校のうちの1校である「単位制高校」については、その説明の記述から推量するに本研究のA高校であることがわかる。その中で挙げられているA高校の特色としては、「施設の満足度が極めて高い」「行事の必要度を感じる者が少ない」「『学歴主義的』志向が低い」「『自ら進んで学ぼう』と答えた割合が高い」「遅刻や休むことにあまり抵抗を感じない」「高校選択の理由として『アルバイトのしやすさ』『評判』が高い」「魅力として『制服がない自由な雰囲気』が高い」といったものであった。筆者たちの今回の調査結果と同様の傾向を示しているように思われ、この結果からも自由であることの利点と問題点が見て取れる。

「自由に」というのは「好きに」という要素を多分に含んでいる。それまでのあまりにも管理され過ぎて自分で決めることができなかった学校教育の反動なのかもしれない。この点については、中学校や中退した高校というところが子ども個々の気持ちや関心、嗜好をどの程度、どのような形で認めていくかということに知見を還元していかなければならないだろう。「好きに」ということは「自らがエネルギーを注いで自主的・自律的に行動する」ということにもつながるからである。例えば、大学生の学びを見たときに、それまで「お膳立てをされすぎて」きた印象を拭えないことがあり、青年後期の段階になってもあまりにも迷えなかったり、自らが責任をとるコミュニケーションができない状況も多分にある。その点では、A高校のような柔軟な履修システム、しかしそれは言い換えれば自らが自分の責任に基づいて計画を立てていくようなシステム（当然、大人の一定のバックアップは必要だが）が早い段階から導入されれば、「自ら学んでいく」という高等教育のあり方にも資するところがあるだろう。

一方で、「好きに」というのは「好き勝手に」という危険性を孕んでいる。例えば、人づきあい苦手な人が苦手な人から学ぶべきものを学ばなくてよいということにはならない。対人関係上のスキルやコンピ

テンスの観点から見ると、人づきあいが自由だということが、「全く交流しない」「葛藤を全く経験しない」という状態を極度に引き起こすと、青年期における対人関係能力の学習機会を大幅に失ってしまうことになり、「つけ」が後々回ってくることも考えられる。手取り足取りしなくてもよいが、必要な働きかけを学校側が考えて、用意することも意味あることだろう。このような問題点は、今回の調査ではあまり表面には出て来なかったが、生徒の個々のライフスタイルと絡めたりしながら、質的な調査等も駆使し、今後明らかにしていきたい。

以上のようなことは、それまでの生き方にある程度の変化をもたらすものである。移行の際には一貫性が重要だと言われ、今までのスタイルを継続できる部分があることも確かに必要である。しかし一方で、次なる段階に進むということは、「新たに切り開いていく」という要素も必要である。「区切り」という言葉は、まさしくそれまでのある種のスタイルや意識を切り離して次に進む必要があることを教えてくれる。「途切れる」かもしれないが「断ち切る」ことでもある。そのような新たな成長の基盤となる、自主的な力を育てる素地としての自由がどのようなもので、それに対しては学校は何ができるかを詳細に調べる必要もある。それによって、単なる「はやり」で終わらない、子どもの成長に適した単位制高校の存在やあり方というものを示せるであろう。

(川原誠司)

4.3 さらなる調査に向けて

今回の郵送調査の回収率は決して高いとは言えず、そのため否定的な印象を持っている人のデータが集まっていない可能性がある。それでも、満足度の低い回答は存在しており、相関などの結果から考えても、A高校の雰囲気「馴染めなかった」ものと思われる。表2で分けた各満足群ごとの回答者の転・退学の割合を算出すると、満足度高群が10.3%、満足度中群が9.5%であるのに対し、満足度低群は30.7%にもなっている。この理由として回答者個人の事情や背景といった特殊性を無視するわけにはいかないが、それでも学校のあり方に還元できるような意見を持っている者もいるはずである。今後満足度が低かった回答者に詳細に聴き取るなどして、必要な情報を得ていくことも大事だろう。

また、不登校の割合が他の高校に比べて高いこともA高校のひとつの特徴である。不登校という状況はひとくくりにはすることはできず、万能で即効的な解決策というものもあり得ないと思うが、このような経験をしてきた者の聴き取り調査などを行うことで、「システムとしての学校」の改善案が得られるかもしれない。幸いにも、今回の調査で後日の面接調査を依頼したところ、多くの人が了承してくれたので、それらの生の声を聴き取り、整理することが次なる課題となるだろう。

(川原誠司)

引用文献

- Eccles, J.S., Midgley, C., Wigfield, A., Buchanan, M., Reuman, D., Flanagan, C. & Mac Iver, D. 1993
Development during adolescence: The impact of stage-environment fit on young adolescents' experiences in schools and in families. *American Psychologist*, 48, 90-101.
- 萩原信一 2001 不登校に対応する高校教育改革 月刊高校教育, 2001年6月号, 22-27.
- 菊地まり 2002 単位制、無学年制高校の私にとっての意味——一人ひとりの生徒にいていねいにかかわることを期待して、そして今 月刊学校教育相談, 2002年7月増刊（事例をふりかえる、かかわりが変わる——近藤邦夫事例研究会）, 106-132.
- 飯島修治 2000 単位制の理念と現実 近藤邦夫・岡村達也・保坂 亨（編）子どもの成長教師の成長——学校臨床の展開 東京大学出版会, pp.253-251.
- 教育オムニバス編集部（編集・取材）2001「単位制」で高校生活をリセット!! りいふ・しゅっぱん
三戸親子 2002 高校生の進路選択と総合学科 近藤邦夫・志水宏吉（編著）学校臨床学への招待——教育現場への臨床的アプローチ 嵯峨野書院, pp.51-68.
- 文部省高等学校課 1998 高等学校中途退学問題について 月刊高校教育, 1998年5月号, 60-67.
- Nicholls, G. & Gardner, J. 1999 *Pupils in Transition*. London: Routledge.
- 武内 清 2001 「特色のある高校」の生徒たち モノグラフ・高校生, 61, 74-80.
- 山藤常雄 2001 不登校・不適応をなくす高校教育改善の手だて 月刊高校教育, 2001年6月号, 12-16.
- 吉田憲司 2000 東京都における特色ある高校づくり 月刊高校教育, 2000年12月号, 26-29.

付 記

調査や回答にご協力いただきましたA高校関係の皆様にご心より感謝申し上げます。また、本論文を作成するにあたり、近藤邦夫先生（東京大学名誉教授）から研究上の様々なご支援を多大に賜りました。厚くお礼申し上げます。なお、本論文の概要については、日本教育心理学会第43回総会において発表した。

（平成14年10月1日受理）